タイ語の転写と転字

日下部文夫

第1部　母音・子音・声調

1.01　ここに，タイ文字[1]について概説を試み，あわせてその転写法と転字法の一案を示す。そのために，まず音韻を明らかにすることから始めよう。

1.02　母音は，長めに発音されるのが本来で，日本語の2拍より幾分短かく実現される。概念的には，2拍分あるとしてよい。

単純母音には，次のここのつがある。

[表1]	前舌	中舌	奥舌
狭	iː	ɯː	uː
半	eː	əː	oː
広	ɛː	aː	ɔː

これらの単純母音は，音節中で短か母音として実現することがある。その場合，音節末では声門閉鎖音その他の子音が現われるか，それに代る次の音節の頭子音が待っていなければならない。

1.03　二重母音は，ななつある。あいまい母音を第2要素としたものと，狭母音を第2要素としたものとの2種類に分けることができる。さきのを開き型二重母音または ə 添え母音，あとのを閉じ型二重母音または i－u 添え母音と呼ぶ。

a）開き型二重母音は，次のみっつがある。

[表2]	前舌	中舌	奥舌
	iˇə̯	ɯˇə̯	uˇə̯

この第1要素の音色が明瞭で，第2要素の［ə̯］の音色はそれについて動揺する。特にそれは末尾子音を伴う場合に著しい。［iˇə̯］［uˇə̯］それぞれにおいて［ə̯］が，［ĕ］に近く，また［ŏ］に近く響く。

b）閉じ型二重母音は，次のよっつがある。

[表3]			
	狭母音から	[ui]	[iu]
	広母音から	[ai]	[au]

狭母音から閉じるものは，例が比較的少く，広母音からのものが多い。

2.01　基本子音21の中には，有声と無声の対立の見られるものがあり，さらに加えて無気と有気の対立が見られる。そして，有声・無声の対立より，無気・有気の対立に比重が大きくかかっている。軟口蓋閉鎖音に有声の［g］を欠き，破擦音に有声の［dʒ］を欠くように，有声音の

影が薄く，無気・有気の対立を含む無声音の方が閉鎖音と破擦音の主軸を成している。このような有声（閉鎖または破擦）音・無声無気音・無声有気音に加えて，鼻音・摩擦音・流音がある。まとめて表示すると次の通りになる。

［表4］

			唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	喉頭音
閉鎖音	有声		b	d			
	無声	無気	p	t		k	ʔ
		有気	pʻ	tʻ		kʻ	
破擦音	無声	無気			tʃ		
		有気			tʃʻ		
摩擦音	無声		f	s			h
	有声		w		j		
鼻音			m	n		ŋ	
側音				l			
顫動音				r			

声門閉鎖音［ʔ］は，音節末の短か母音に常に伴って現われる。

音節末では，閉鎖音［p］［t］［k］があるが，それらは内破音として実現する。

半母音［j］［w］は，頭子音として，それぞれ前舌母音，奥舌母音に接すると，［dʒ］［v］として実現する傾きがある。

2.02　複合子音には，次のように閉鎖音と流音の結合による二重子音と，軟口蓋閉鎖音と，半母音［w］の結合に依る二重子音とがある。それらは，次の12種になる。

［表5］

	側音		顫動音		円唇半母音	
両唇閉鎖音	pl	pʻl	pr	pʻr		
歯茎閉鎖音			tr	tʻr		
軟口蓋閉鎖音	kl	kʻl	kr	kʻr	kw	kʻw

これらのうち，［tr］の実例は稀で，特に［tʻr］は少い。［kw］［kʻw］は，母音［a］の前で実現する。

3.01　タイ語の音節には，頭子音，母音，尾子音，声調などの要素がある。

音節は，次のように構成される。

a）母音だけか（開音節）。

例　［aː］［ai］

b）頭子音と母音か（開音節）。

例　［haː］［kluˇə̯］［lai］

c）母音と尾子音か（閉音節）。

例　［ɯt］［iˇə̯ŋ］

d）頭子音と母音と尾子音か（閉音節）。

例　［pʻop］［rɯˇə̯n］［tʃat］

3.02　頭子音には，声門閉鎖音を除き，すべての子音が現われる。複合子音は，頭子音としてしか現われない。そのうち，円唇半母音によってつくられる［kw］と［kʻw］は，ただ［a］の前だけに見られる。

尾子音としては，閉鎖音［p°］［t°］［k°］と［ʔ］，鼻音［m］［n］［ŋ］，有声摩擦音［j］と［w］が現われる。このうち，声門閉鎖音［ʔ］は，つねに短か母音とともに音節を構成するという制限がある。尾子音だけを改めて表にまとめると次の通りになる。

［表6］	両唇音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	喉頭音
閉鎖音	p°	t°		k°	ʔ
鼻音	m	n		ŋ	
有声摩擦音	w		j		

3.03　母音の現われ方については，次のようにいえる。

a）開音節では，すべての母音が現われる。

b）閉音節では，単純母音か，そうでなければ，開き型二重母音でなくては現われない。

4.01　声調は，音節ごとに備わる，相対的な音高の持続形式である。これは，子音，母音の音色とともに形態素を完成させる要素となる。即ち，この声調は，基本的には，音節ごとあるいは各語ごとに固定している。

声調には，普通次のいつつの種類が認められる。

a）平調：――話手の自然な発声の場合の音高。中庸の高さで，音高の変化が耳に認められない。

b）抑調：――話手の自然な声の高さよりも低い高さ。平調より幾分低く始まり，さらに低くなって，一定の高さを保ちながら自然におわる。

c）降調：――低い高さに降ってゆく。およそ平調の高さで始まり，次第に下降しておわる。肯定の文末のイントネーションに見られるような調子。

d）揚調：――話手の自然な発声よりも高くあげていく。平調よりも幾分高く始まり，急に上昇し，瞬時その高さを維持し，次いで急に下降する。

e）昇調：――話手の自然な発声よりも高いまま継続する。実際には，始めが平調より低く，平調の水準を超えて次第に上昇する。疑問の文末に見られるイントネーションに当たる調子。

以上の各調を概念的に示すとすれば，まず自然な発声の音高を維持維続するものを水平線で示し，それが平調だということになる。その下に平行に引いた線が抑調を，その上に引いた平行線が揚調を，下の平行線の上に置かれる点が降調を，上の平行線上の点が昇調を示すと考えたらよかろう。各調を実現するために，平調以外はおのずから附随的な抑揚を加えなければならなくなる。

4.02　各調の実現の有様も種類の説明に加えておいたが，さらに説明をすれば，降調と昇調とは水平線からの傾斜線で実現されるが，その低いところ，またはその高いところに達すると，声門の狭まりが加えられ，息が急に弱まる。なお，発声運動を継続するならば，そこに声門摩擦音が現われることがあるが，発声運動のその狭まりとともに打ち切られるのが正規なものと考えられる。

昇調の実現では低い音から漸次高い音に移る。また揚調の実現で昇ってからのちに降るのは概念的な形式と著しく異なった点である。

なお，高さの持続が短かいために，水平線なり，斜線なり，線状に実現しないで，ほとんど点のように聞かれる場合がある。即ち，短か母音に閉鎖音が末尾子音としてついた音節においてそうである。これは，降調あるいは昇調だが，便宜上取り分けて名付けるならば，低調あるいは高調とするべきだろう。

f）低調は，抑調の高さで始まり，瞬時その高さを維持して急に中断する。

g）高調は，平調よりも高く始まり，昇調の頂点の高さまで急に上昇して途端に中断する。

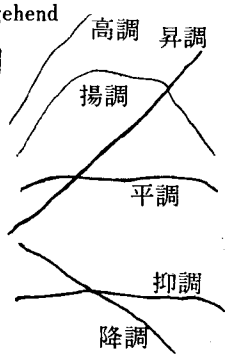
この低調と高調は，多くの意見に従って，ここでは認めないことにする。

4.03　参考までに，これらの声調に関する従来の諸学者の意見を表示すると次のようになる。

［表7］	Pallegoix	Cartwright	Maspero	Wershoven	Bradley	Trittel	Haas
平調	rectus	common	égal moyen	gleich	middle	eben	middle
抑調	circum-flexus	deep	égal inférieur	tief	depressed	nieder-gedrückt	low
降調	demissus	dropped	descendant inférieur	fallend	falling	fallend	falling
揚調	gravis	acute	retombant supérieur	eingehend	circumflex	rückkehrend	high
昇調	altus	rising	montant inférieur	steigend	rising	ansteigend	rising
低調	———	———	———	———	short low	tiefe-eingehend	——
高調	———	———	———	———	short high	hohe-eingehend	——

なお，Bradley によって図示すれば，各声調の高低の曲線は次のようである。

［図1］



C. B. Bradleyによる。

4.04　音節を構成する音によって，声調の実現が次のような制限を受ける。

a）開音節および尾子音に鼻音か有声摩擦音を持っている音節には平調から昇調に至る，いつつの声調のどれもが実現する。

b）短か母音に閉鎖音を尾子音に加えて持っている音節は平調に実現するのが原則である。

c）一般の母音に尾子音として閉鎖音を持つ音節は，抑調と降調に実現するが，それ以外では短母音で平調にしか実現しない。（のちの 10.03［表34］を参照）

4.05　単語における声調については，次のようなことがある。

a）単音節語は，それぞれ声調を持っている。ただし，文中でその声調を失う場合，つまり強勢のない場合もでてくる。その場合には，平調になる。

b）1語中の各声調の間，または文中の各語の声調の関係を見ると，まず揚調を第1とし，次いで昇調，降調の音節に強勢が置かれる傾向がある。

c）　2音節以上の語になると，短か母音を含む音節の声調は，長母音を含む音節の声調に対して弱い。つまり，強勢が置かれない傾向がある。

---

① ここにタイ文字といい，タイ語というのは，タイ国語として行われる言語とその文字をさし，厳密にはシャム語・シャム文字とよんで明確にすべきものをいっている。

第2部　転　写　法

5.01　音韻に引き続いて，転写法 transcription の目途を付けることにしよう。まず母音から考えるのに，すでにいわゆる三重母音の存在に着目して開き型二重母音の第2要素であるあいまい母音［ə̯］を狭母音の展開する量に還元して扱ったことがあった。② いま，その時の考え方の原則を再録してみると，次のようである。

1）音節母音部の具体的な実現形の傾向特性（このみ）を握む。（前提）

2）複合母音のどちらかの質を主要なものとすれば，他方の質をその量のうちに含むことができる。他方の質は量だけを代表し，質としては無意味なわたり音となる。（わたり音のきまり。）

3）同一母音の長さの伸びと厚み（調音の広狭）の増しとは逆になる。広と狭の1段階の差は短と長に置き換えられる。（読みかえのきまり。）

4）母音の一端の拡張は他端の縮少を招く。半開き長母音の一端を広母音に置き換えると，長さを変えない限り，他端は狭母音となる。（シーソーのきまり。）

5）そのこのみを握めば，もとに帰れるようにきまりを適用することが必要。つまり，具体音から抽象音へ，抽象音から具体音への相互転換が単純な法則でいつでも可能なように適用する。（立ち帰りの心得）

5.02　タイ語の母音についてみるのに，(1) その傾向特性としては，あとが開いていく傾きがあり；(2) その主要な質は前よりに認められて，あとよりの質は量を代表するわたり音と認められ；(3) [e]と[ɛ]や，[o] と [ɔ] の対立は，短と長という量的対立の質的置き換えとも見ることができ；(4) また，[a] と [ɯ]の複合を仮定するとき，あとの [ɯ] が [ɯ] より広く調音されると，それに応じて前の [a] は [a] より狭くなり，その結果は中舌の [ə] の長母音を生み出す，と概括していえるだろう。

5.03　さて，タイ語の母音が特にその狭母音において，じゅうぶんな量の代りに，その末端を広めの母音という質に置き換えて実現する傾向特性を持っているとする。この時に，三重母音といわれる [iˑə̯u] [ɯˑə̯i] [uˑə̯i] のどれもが，始めと終わりのどちらも例外なく狭母音だということと，それにさらに加わる末尾子音はないことに着目する。すると，末尾の狭母音とされるものが，その実，子音なのであり，そのwまたはjを除くと，開き型二重母音そのものが残ることを知る。そして，その開き型二重母音が，狭母音の量の質的置き換えを末尾に向かって実現したものと見ることができる。つまり，次のような転写の系列が考えられる。

[表8]	i	iw	y	yj	u	uj
	[iˑə̯]	[iˑə̯u]	[ɯˑə̯]	[ɯrə̯i]	[uˑə̯]	[uˑə̯i]

ここでwあるいはjに先立つ狭母音が，奥舌のwに配しては前舌のi，前舌のjに配しては奥舌のuまたは中舌のyとなっていることに着目するならば，もし，組み合わせを，前舌と前舌，奥舌または中舌と奥舌とした場合にどうなるだろうか。その回答は，次の通りになる。つ

まり，それらの場合，前後の調音点が近いためにわたりが際立たず，量の質への転換が抑えられたものと解するわけである。それが次（表9）の長母音になる。

［表9］

ij	yw	uw
[iː]	[ɯː]	[uː]

5.04　狭母音の場合に平行して，広母音について系列をたてるとすれば，次のようになるだろう。

［表10］

e	ew	a	aj	o	oj
[eˇə̯]	[eˇə̯u]	[aˇə̯]	[aˇə̯i]	[oˇə̯]	[oˇə̯i]
ej		aw		ow	
[eː]		[aˇə̯u]		[oː]	

ここに試みに示された音価は，必ずしもタイ語の母音に現実として見当たるものではない。広母音について，［ə̯］を際立たせた音価が成立しにくいことは，すでに量に見合う質がそこに含まれているのが広母音だと見ることができるので，じゅうぶん了解されよう。ただ，［ə̯］を持つべき場合には，質の上で広めの音色を実現するものと考えてよかろうし，そうすることによって，タイ語に備わっている母音の音価に対応した解釈が整えられることになる。改めて，それらの系列を繰り返して示すことにしよう。

［表11］

e	ew	a	aj	o	oj
[ɛː]	[ɛːu]	[aː]	[ai]	[ɔː]	[ɔːi]
ej		aw		ow	
[eː]		[au]		[oː]	

5.05　これで，母音のあらましがそろったが，まだ中舌母音の［ə］の位置づけがされていない。e[ɛː]に対する ej[eː]，o[ɔː]に対する ow[oː]と並んで，a［aː］に対して何が置かれるべきかが問題になる。とすれば，y［ɯ］に対応する半母音を特に設けて，aỹ［əː］とすることになる。なお，タイの正書法のうえでは，これが oe 相当のつづりで表記されていることに注目され，単独に考えれば，それにならうこともありうるが，音節構造として，主母音同志の複合を許さないものとして，aỹ を選びとるわけである。

5.06　なお，問題として残っているのは，短か母音である。そこで，広母音における長母音の量的延長を抽出して r で示すことにすれば，それは同時に，狭母音の展開の質的に置換された量と考える［ə̯］をも，それが代表することが許されるだろう。次の表で，r の有無による長短の系列を示す。

［表12］

ir	er	yr	ar	ur	or
[iˇə]	[ɛː]	[ɯˇə]	[aː]	[uˇə]	[ɔː]
i	e	y	a	u	o
[i]	[e]	[ɯ]	[a]	[u]	[o]

ここにrを取りあげて量を代表させたのは，第1にjやwと並んで子音性のものとして設定したからだし，第2に音節頭子音として現われる［r］の本質を呼気通路に対する口むろにおける中立性障害と見るからであり，第3に有声の持続音として，jやwと並んで母音性を荷なう半面があると考えるからである。

このrがこえ（有声の呼気）に対する障害であるのに対し，いわゆる喉音のhが，いき（無声の呼気）に対する口むろ一般での障害（せばめ）と見ることができ，このふたつは有声と無声の対をつくる。

5.07　母音の転写をここに一応とりまとめると次の通りになる。

［表13］

i	e	y	a	u	o
[i]	[e]	[ɯ]	[a]	[u]	[o]
ir	er	yr	ar	ur	or
[iʳə]	[ɛː]	[ɯʳə]	[aː]	[uʳə]	[ɔː]
ij	ej	yj	aj	uj	oj
[iː]	[eː]	[ɯʳə̯i]	[ai]	[uʳə̯i]	[ɔːi]
iw	ew	yw	aw	uw	ow
[iʳə̯u]	[ɛːu]	[ɯː]	[au]	[uː]	[oː]
—	—	—	aỹ	—	—
			[əː]		

5.08　なお，末尾子音について述べるに当たって改めて説明が必要だろうが，声門閉鎖音 x［ʔ］を設けると，それで終わる母音の系列としては，rを添えるものにならって次のようなものができる。

［表14］

ix	ex	yx	ax	ux	ox
[iə̯ʔ]	[ɛʔ]	[ɯə̯ʔ]	[aʔ]	[uə̯ʔ]	[ɔʔ]

末尾に声門閉鎖音を控える母音としては，用例が少ないが，［e］と［o］がまだ残っている。これについては，それぞれ ejx［eʔ］と owx［oʔ］のような末尾子音の複合を考慮すべきかと思われる。いずれにせよ，jとw，rとxに及べば，すでに末尾子音に話が及んでいるわけである。

6.01　末尾子音には，閉鎖音［pᵒ］［tᵒ］［kᵒ］及び［ʔ］，鼻音［m］［n］［ŋ］，半母音［ŭ］［i̯］が認められているが，それに加えてr［ə̯］も，さらに ỹ［ŭɯ］も考えに入れることになった。

このうち，閉鎖音は内破音なので，有意味な気息の開放がないことを考慮して無声無気音に近いと解釈し，これを（無声有気音をp，t，cで代表させるのに対して）b［pᵒ］，d［tᵒ］，g［kᵒ］で表わすことにする。そこで，すでに示されたrやỹをも加え，末尾子音をまとめて次のように示してよかろう。

[表15]

w	j	ỹ	r
[ŭ]	[i̯]	[(ə)ː]	[ə̯/ː]
b	d	g	x
[p⁰]	[t⁰]	[k⁰]	[ʔ]
m	n	q*	
[m]	[n]	[ŋ]	

* 字形qは，できればŋを用いたいところだが，普通の活字には用意がない点を考慮して，ŋに字形の似通っているものとして選びとっている。

6.02　また，すでに母音について述べた場合に扱わなければならなかったw，j，ỹ，rには，閉鎖音との末尾複合子音がそろっている。次の表で見てほしい。

[表16]

b [p⁰]	d [t⁰]	g [k⁰]	x [ʔ]
wb [(o/u/ɯ)ː p⁰]	wd [(o/u/ɯ)ː t⁰]	wg [(o/u/ɯ)ː k⁰]	wx [(o/u)ʔ]
jb [(e/i)ː p⁰]	jd [(e/i)ː t⁰]	jg [(e/i)ː k⁰]	jx [(e/i)ʔ]
ỹb [(ə)ː p⁰]	ỹd [(ə)ː t⁰]	ỹg [(ə)ː k⁰]	ỹx [(ə)ʔ]
rb [ə̯/ː p⁰]	rd [ə̯/ː t⁰]	rg [ə̯/ː k⁰]	——
m [m]	n [n]	q [ŋ]	——
wm [(o/u/ɯ)ː m]	wn [(o/u/ɯ)ː n]	wq [(o/u/ɯ)ː ŋ]	w [ŭ/(ɯ)ː]
jm [(e/i)ː m]	jn [(e/i)ː n]	jq [(e/i)ː ŋ]	j [i̯]
ỹm [(ə)ː m]	ỹn [(ə)ː n]	ỹq [(ə)ː ŋ]	ỹ [(ə/ɯ)ː]
rm [ə̯/ː m]	rn [ə̯/ː n]	rq [ə̯/ː ŋ]	r [ə̯/ː]

6.03　これらが母音と結合して，どのように実現するか次に表示する。閉鎖音b，d，gはbで代表させ，鼻音m，n，ŋはmで代表させて，他の表示を省き，別にrと∅の系列だけを残して示そう。閉鎖音・鼻音の系列内では，その実例に型の上で差が認められないからである。

[表17]

	b	m	wb	wm	jb	jm	ỹb	ỹm	rb	rm
i	ip	im	—	—	iːp	iːm	—	—	iˑə̯p	iˑə̯m
e	ep	em	—	—	eːp	eːm	—	—	ɛːp	ɛːm
y	ɯp	ɯm	ɯːp	ɯːm	—	—	—	—	ɯˑə̯p	ɯˑə̯m
a	ap	am	—	—	—	—	əːp	əːm	aːp	aːm
u	up	um	uːp	uːm	—	—	—	—	uˑə̯p	uˑə̯m
o	op	om	oːp	oːm	—	—	—	—	ɔːp	ɔːm

	x	∅	wx	w	jx	j	ỹx	ỹ	rx	r
i	iə̯ʔ	i	iu	iːə̯u	iʔ	iː	—	—	(iə̯ʔ)	iˑə̯
e	ɛʔ	e	eu*	ɛːu	eʔ	eː	—	—	(ɛʔ)	ɛː
y	ɯə̯ʔ	ɯ	(ɯʔ)	ɯː	—*	ɯˑə̯i	—	—	(ɯə̯ʔ)	ɯˑə̯
a	aʔ	a	au**	aːu	ai**	aːi	əʔ	əː	(aʔ)	aː
u	uə̯ʔ	u	(uʔ)	uː	ui	uːə̯i	—	—	(uə̯ʔ)	uːə̯
o	ɔʔ	o	oʔ	oː	—*	ɔːi	—	—	(ɔʔ)	ɔː

* これらについては，のち（10ページ）に補足するが，ewx に [eːu]，yjx に [əːi]，ojx に [oːi] がはいる。

** 現に [aːu] [aːi] があるので，[au] [ai] を -x（-wxと-jx）の方に移して，席をゆずることにする。

6.04　これらに加えて，なお，半母音などw，j，ỹ，r 相互の組み合わせで複合の末尾子音ができる場合を認めなければならない。そうしてはじめて位置が定まるように思われる，とり残しの複合母音（音声段階の）は，次の通り。

[表18]	wj	ỹj	rj	jw	(ỹw)	rw
e	—	—	—	eːu	—	—
a	—	əːi *	(aːi)	—	—	(aːu)
o	oːi *	—	—	—	—	—
参考：[uːə̯i]		[ɯˑə̯i]	[ai]	[iˑə̯u]	・	[au]

これで，いわゆる韻母（中心母音と末尾子音）について，ひと通り尽くしたかのようだ。しかし，半母音相互の複合については，次のような不審が打たれる。

(1)　最後の韻母の表（18）は，いかにも偏りが大きく，空欄も多すぎる。

(2)　最後の表以外に見られる複合末尾子音は，初めの子音に半母音系列のものを，あとに閉鎖音か鼻音をおいている。いかにも当然だし，それがタイ語音節の一般的性格と認められる。

(3)　先にあげた韻母の表のうち，x あるいは∅で終わるものの表（17）では，yjx と ojx の

ところが空欄になっている。

このような疑問点を生かして，その有効な解決をはかるには，次のようにすればよいだろう。

(1) [ɯˈəi] が量をつめて発音されなければならない時，[ɯ] と [ə] の調音点が同一で，その開きが近いとなれば，調音に段階を付けることが困難でもあり，聴き分けるにしても非常に難かしいにちがいない。その結果は [əi] または，[əːi] ができあがると考えられる。つまり，yj が [ɯˈəi] なら yjx に [əːi] が実現してもおかしくはないということになる。

(2) x が付けば，短かくなるべきだが，上に述べたように，[əːi] 即ち yjx の音価となることがあるならば，[oːi] が ojx の空欄をふさぐものとしてよい。なお，oj は [ɔːi] である。

(3) そうなれば，ewx の音価に [eːu] があってよい。タイ文字による表記では[eːu] と同じにつづって，[eu] には短縮符号を上にかぶせている。さしたる差異を認めていないことを示しているだろう。

このように，ewx においては [eːu] と [eu] というふた色の音価がぶつかりあう点がまずい。それを除けば，空欄が埋められることによって，x/∅ による韻母のあるべきものはきれいにそろい，末尾子音の複合には半母音＋子音という形式が整い，その結果，斉一に見えない補足的な韻母表（18）をひとつ解消することができる。

これで始めて，末尾子音について，あるいは韻母についての検討と整備が完了したわけである。

7.01 音節頭子音には，次のようなそろいがあり，ここで一応かりに字をあてておく。

[表19]

ƀ [b]	đ [d]	—	—	—
b [p]	d [t]	ǧ* [tʃ]	g [k]	x [ʔ]
p [p‘]	t [t‘]	č* [tʃ‘]	c [k‘]	—
f [f]	s [s]	—	—	h [h]
m [m]	n [n]	—	q [ŋ]	—
w [w]	l [l]	j [j]	—	r** [r]

* ǧ と č を閉鎖音とともに同じ瞬間音の系列に入れる。

** r は，l とともに半母音系列とし，その上，有声の呼気に対する無限定な（摩擦的）障害とみて，まず喉音に位置づける。末尾における r と呼応させて考える。

7.02 上の表で軟口蓋音と喉音を，ともに調音点の奥まっているものとして，とりまとめると，持続音の有声・無声と，鼻音を含む閉鎖音の有声・無声がちょうど空欄を埋めあうことになる。ただ，r についてその性格を喉音性のものとする点の仮設と，x について有声閉鎖音に数

えいれるという仮設と，このふたつの前提に立ってのことである。xが母音の声立てと緊密に結び付いているということで，それを有声音に加えることはゆるされていいと考えるし，rについては，その声立てに対する活動的な調音の効果を考えると，無限定・中立的な性格を本質とするものとしてよかろうと思う。このrは，無声のhに対する有声音としての位置を保っているというべきだろう。奥で調音されるものとして，次のようなそろいができる。

［表20］

c	g	x	q	h	r
[k‘]	[k]	[ʔ]	[ŋ]	[h]	[r]

7.03　破擦音 ǧ［tʃ］，č［tʃ‘］は，その系例に有声瞬間音ばかりでなく，無声摩擦音，鼻音を欠いている。すでに見てきた通り，音節末でもこの音の系列は現われない。従って音韻体系の上で占める位置が偏ることになるのは，もともとt，dかc，gかの口蓋化音として存在するものだからだろう。ここでは，まず，語頭のj［j］の扱いを考慮に入れ，またc，gにcw［kw］，gw［gw］という半母音との複合がありうることとの均衡をも考えて，č，ǧ を複合子音 cj［tʃ‘］，gj［tʃ］に置き換えることにする。これにならって音節頭のj［j］はxj［j］となる。まとめて示す。

［表21］　cj［tʃ‘］　gj［tʃ］　xj［j］

これに対して，語頭のwによる複合子音もとりあげてまとめておこう。

［表22］　cw［k‘w］　gw［kw］　xw［w］

7.04　なお，ち，すらの字形は，活字に用意もなく，実際上不便なので，本来摩擦音に当てられるべき字ではあるが，それぞれにv（<ち），z（<す）を起用することにする。ついでに先の表で瞬間音が上から有声音・無声音の順だったのを，無声音・有声音に置きなおして配列してみよう。

［表23］

p	t	cj	c	cw
[p‘]	[t‘]	[tʃ‘]	[k‘]	[k‘w]
b	d	gj	g	gw
[p]	[t]	[tʃ]	[k]	[kw]
v	z	xj	x	xw
[b]	[d]	[j]	[ʔ]	[w]
f	s	—	h	—
[f]	[s]		[h]	
m	n	(qj)	q	—
[m]	[n]		[ŋ]	
(w)	l	(j)	r	((w))
	[l]		[r]	

7.05　この表に見られる半母音複合子音の外になお，l と r によるものが次のように追加される。

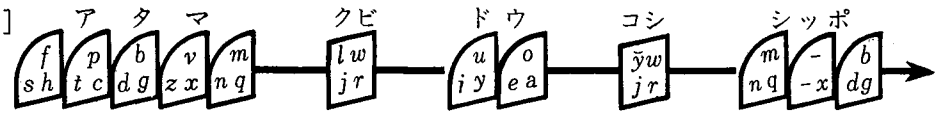
[表24]

pl	—	cl	pr	tr	cr
[p'l]		[k'l]	[p'r]	[t'r]	[k'r]
bl	—	gl	br	dr	gr
[pl]		[kl]	[pr]	[tr]	[kr]
—	—	xl	—	—	xr
		[l]			[r]

ここに tl, dl, zl を入れ，その音価をそれぞれ [tʃ'] [tʃ] [j] とすることもできよう。cj—gj—xj か，tj—dj—zj か，それとも tl—dl—zl か，そのどれを [tʃ'] [tʃ] [j] に当てるか。それは，音節構造の斉一性から検討すべきことだ。（7.07を見よ。）

7.06　以上，検討を続けてきた結果をまとめて，タイ語の音節構造を図式にして示すことにする。

[図2]



(1)　タイ語の音節は，アタマとドウに，コシまたはシッポの備わることを原則とする。つまり（CVC になる。）それぞれに当てて，そこに現われうる音項のひとつが選ばれる。

(2)　時にクビが加わり(CSVC)，時にコシとシッポがともに加わること(CVSC)もある。その両方が同時に起こることがある(CSVSC)。さらに時にコシで終わることもある(CVS/CSVS)。

(3)　なお，これに声調（T）がかぶさる。声調の5種は，上（高）と下（低）に去（急な途切れ）を特徴として現われる4種に平（中）の1種を加えたものとする。

中＝平／˙˙／;　上＝揚／ˆ／,　下＝抑／ˇ／;
上＋去＝昇／ˊ／,　下＋去＝降／ˋ／˙

別に，積極的な声調の加わらないもの，つまり軽声がある。

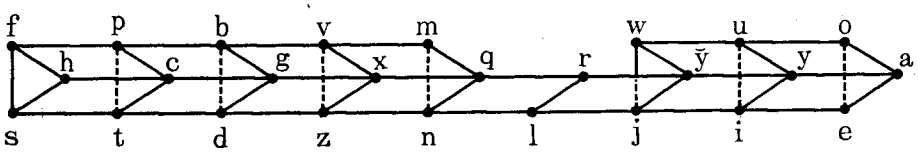
7.07　さて，音節図式③でみられる通り，アタマ・ドウ・シッポを通じて，その音韻体系には3本の軸が通った相関束が成立している。それに反して，クビとコシについては軸がよっつ必要であり，しかもそのうちのひとつに座を占める音項が，外のみっつが一致しているのに，異なっている。そして，クビの l は，t，d の軸に置かれるべきはずだが，そこにある j と座を争うわけにもいかないので，よっつめの軸に避けて置かれたわけだ。できれば，このような音節全体から見ての不均衡と，クビについて見た不均衡と，ふたつながらまとめて解消できないかと考えても，コシの ỹ の除きようがない。とすれば，この前後の渡り音の座だけの均衡を認めることで満足する外ないと思われる。

従って，先の口蓋化子音についての，しかるべき複合の選択から均衡を欠く l によるものが

まず除かれ，jによるものが残される。jとは，tかcのどちらが複合すべきだろうか。それには，z［d］とx［ʔ］の間でみる限り，なんといっても zj［j］よりも xj［j］の方が，その音価と結び付きやすいことから，やはり cj—gj—xj の方が選ばれる。先の表にあげた一応の選択は，裏付けができたわけである。

7.08　これで，タイ語音節を構成する音項は，3軸・9層でそのうちひとつの項を欠く26をもつ相関束をつくる。

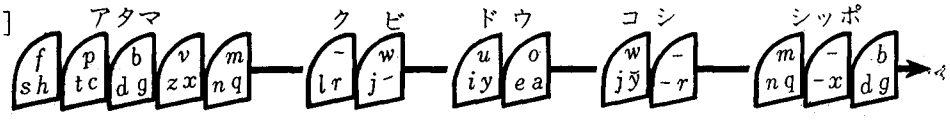
［図3］



これらのうちから5層の15項が頭子音に配され，それに複合するのに2層に属する4項が当てられる。母音には，そのうち2層6項が用意されている。末尾子音には，先の5層15項のうちからさらに2層6項が当てられるほかに，複合のためにも用いられる先の2層から4項をとって当てられる。

さきの音節図式は，相関束からみて，次のようにすべて3軸に改めるべきだ。

［図4］



こうなって始めて，先に問題とした，クビのlと，コシのỹの座が安定する。lは，t—nの軸，ỹはc—qの軸に置くのが当然であり，そうすれば音節図式の終始を首尾一貫して3本の軸がつらぬくことになる。ここにタイ語の真正の音のありかたが浮びあがったわけである。

---

② 量と質，音節構造の斉一性と相関性の設定——シャム語・ベトナム語などの母音を材料として——「岡山大学法文学部学術紀要」17（1964・3）。

おな，同様な考え方は，すでに次の論考の基本的立場であった。切韻の韻母を解釈する「岡山大学法文学部学術紀要」3（1954・3）。

③ 「音節図式」については，すでに筆者による次の論考にその考えが出ている。東京語の音節構成，「音声の研究」10（1963・1）。音節図式と諸方言「日本方言研究会研究発表会発表論集」6（1968・5）。三つの表記案—朝鮮語・安南語・ビルマ語の音節構造—「岡山大学法文学部学術紀要」30（1970・3）。

第3部　転　字　法

8.01　現在，タイ文字を代表するのは，南タイ文字で，タイ国のメーナム河流域を中心に四方に流布し，ラオの文字としても用いられている。インドのカムティからシャンを経て，タイ国内のユアンに至るまで用いられている西タイ文字は，古代モン文字に由来する。それに対して，いわゆるタイ文字は，それらとともに，アラム文字に由来するインドのブラーフミの分派の南インド文字の子孫でありながら，別に古代クメール文字から生まれた古シャム文字から造られた。それをラームカムヘーン王（1275年即位）が指導したとされ，その文字をスコータイ文字といい，南タイのシャム文字は，それに基づいている。東ラオに行われる文字は，古シャム文字の面影を残している。カンボジア文字はもちろん，黒タイ・白タイの用いる東タイ文字も，クメール文字の後裔である。

8.02　タイ文字の体系は，梵字を始めとするインド系の文字として，子音分離型の字母文字である。子音字（xagson）の上下または前に母音符号を添えるか，そのままで右へ綴ってゆく。それにアクセント符号も加えられることがあって語が表記される。

子音字（xagson）には，3類の別があり，その伝統的な分類に従っていうと，まず中位字は通常7字（古い同音異字が別に2字）ある；上位字も通常7字（別に古い同音異字が4字）；下位字は基本としての14（古い同音異字が6）に主として借用語に用いられる現用の同音異字が3で，都合17字ある。これら3類合わせて31字が通常の子音字として数えられる。旧来の同音異字は別に12字ある。子音字には一定の配列順位がある。

8.03　母音符号は一般に決まった順位がない。実際につづるときには，必ず子音字に添えなければならないから，いわゆる母音音節では，喉音を示す子音字に母音符号を付随させることになる。この符号は普通13種が数えられるが，いわゆる母音部を被うためには不足であるし，そうかといって符号の基本は，結局6種からできているので，その数についても定め難い。13種のうち，8種は基本的な4種の派生（長短の対立によるものだが）分裂だし，別の1種は（13種外の古いその同音異字とともに）複合つまり［ai］を示すための特殊な字であり，さらに2種の本質的には子音字と解釈されるものが含まれている。この子音字らしい2種が，母音を示すとされながらも，さきにあげた喉音子音字や，それから半母音子音字とともに外の子音字のあと（右）に添えて用いられるのは，その本性によるものと考えられる。（のちに9.01であげる音節表記図式を参照）これらを除くとすると，母音符号は6種に帰する。しかしまた，13種をさらに複合させた母音表記も用意されている。

音節の表記に当たって，母音符号の音価は，その複合によって大きく変動するが，音節からみる限り一定の複合には，一定の音価が決まっている。子音字は，語頭で音価が定まっているが，語末の音価を別に持つ場合がある。声調は，音節頭に立つ子音字の3類別によって無標記のままに決まった固有の抑揚を示している。その上に，声調符号が4種あり，これを子音字の右上に添えるか，時に気音を示す上位字を音節の始めに加えることによって別の声調を表わす。そこで，これらをつづって語の表記ができるわけである。

タイ文字の性格からいって，子音字を中心に配置された符号を音節ごとに把握する必要性は特に大きい。

8.04　子音字を新旧合わせて44字，一般に行われる順位に従って次に紹介する。

［表25］

順位	字形	呼　　称	種　別	順位	字形	呼　　称	種　別
1	ก	gor gajx	中位字	23	ท	tor taharn	下位字
2	ข	cor cajx	上位字	24	ธ**	tor toq	下位字
3	(ฃ)	cor curd	上位字	25	น	nor nuw	下位字
4	ค	cor cwaj	下位字	26	บ	vor vajxmajx	中位字
5	(ฅ)	cor con	下位字	27	ป	bor blar	中位字
6	(ฆ)	cor xracaq	下位字	28	ผ	por pyq	上位字
7	ง	qor quw	下位字	29	ฝ	for far	上位字
8	จ	gjor gjarn	中位字	30	พ	por parn	下位字
9	ฉ	cjor cjijq	上位字	31	ฟ	for fan	下位字
10	ช	cjor cjarq	下位字	32	ภ**	por sampawx	下位字
11	ซ	sor sow	下位字	33	ม	mor mar	下位字
12	(ฌ)	cjor gacjaỹ	下位字	34	ย	xjor xjag	下位字
13	ญ*	xjor xjiq	下位字	35	ร	xror xryr	下位字
14	(ฎ)	zor cjazar	中位字	36	ล	xlor xliq	下位字
15	(ฎ)	dor badag	中位字	37	ว	xwor xwern	下位字
16	(ฐ)	tor tarn	上位字	38	(ศ)	sor sarlar	上位字
17	(ฑ)	tor mon tow	下位字	39	(ษ)	sor xrywsij	上位字
18	(ฒ)	tor puw tawx	下位字	40	ส	sor syr	上位字
19	(ณ)	nor nejn	下位字	41	ห	hor hijb	上位字
20	ด	zor zeg	中位字	42	(ฬ)	xlor gjular	下位字
21	ต	dor dawx	中位字	43	อ	xor xarq	中位字
22	ถ	tor tuq	上位字	44	ฮ	hor noghuwg	下位字

* 13番の下位字は，下の符号を省いた新字体が用いられる。

** 24番，32番の下位字は，借用語に用いる。23番，30番それぞれに対する同音異字。

*** なお，括弧の場合はすべて旧正書法に見られる同音異字の類。

8.05　母音符号13種を次に紹介しよう。

［表26］

	符　号	名　　称	代表音		符　号	名　　称	代表音
1	右に ั*	xwisadcjanij	[aʔ]	10	ใ 左に	majx nar	[eː]
2	上に ั	majx pad	[a]	11	เ 左に	majx nar	[ɛː]
3	右に า*	xlargcarq	[aː]	12	ไ 左に	majx malaj	[ai]
4	上に ิ	pin xij	[i]	13	(ไ) 左に	majx murn	[ai]
5	上に ี	~(xlex)fontorq	[iː]	14	โ 左に	majx xow	[oː]
6	上に ึ	~　narycahid	[ɯ]		右に อ*	dur xor	[ɔː]
7	上に ื	~　fan nuw	[ɯː]				
8	下に ุ	dijn xird	[u]	15	左右に เ า**	—	[au]
9	下に ู	dijn cuw	[uː]	16	右に ำ**	—	[am]

* 1番・3番と，子音字43番そのままの dur xor とは，本質的には子音字である。語頭または音節頭の子音字のあと(右)に添えて用いる。つまり，音節末専用子音字。その他は，音節頭子音字の前か上下に添える。

** 15番・16番は，特殊な複合として，母音符号に加えて数えあげるのが普通である。 11番もその点からは同じような複合である。

*** 13番は，12番の同音異字であり，新正書法では省かれている。

8.06　なお，旧正書法には，次のようなふたつの syllabic な子音字があった。

［表27］　(ฤ)　[rɯ]　　(ฤๅ)　[rɯː]
　　(ฦ)　[lɯ]　　(ฦๅ)　[lɯː]

声調符号は，次のよっつである。

［表28］　上に ่　　majx xejg
　　上に ้　　majx tow
　　上に ๊　　majx drij
　　上に ๋　　majx gjadaxwar

8.07　タイ語の転字法には，Pallegoix (1850) ④ 以来いくつかの試みがある。Frankfurterらの共同案 (1913) ⑤ もあり，ハノイにいた Coedès と連絡しながらまとめられたタイ国学士院案(1940・3) もある。ここに，この学士院案の精密方式と対照しながら，新しく転字の方式を示すことにする。

［表29］

音　価	文　字	転　写	学士院式	転　字	順　位
k	ก	g	k	g	1
k‘	ค	c	k‘	k	4

k‘	ข	c	kh	kh	2
k‘	(ฃ)	c	kh′	k̲h	3
k‘	(ค)	c	k‘′	k̲	5
k‘	(ฆ)	c	kh‘	k‘	6
h	ฮ	h	h′	h‘	44
h	ห	h	h	h	41
ŋ	ง	q	ng	q	7
ʔ	ะ	x	ḥ	x	(1)
tʃ	จ	gj	č	ǧ	8
tʃ‘	ช	cj	c‘	č	10
tʃ‘	ฉ	cj	ch	ch	9
tʃ‘	(ฌ)	cj	ch‘	c‘	12
s	ซ	s	ç	š	11
s	(ศ)	s	s′	s‘(ç)	38
s	(ษ)	s	ṣ	ṣ	39
s	ส	s	s	s	40
j	ย	j	y	j	34
d	ด	z	d	z	20
d	(ฎ)	z	ḍ	ẓ	14
t	ต	d	t	d	21
t	(ฏ)	d	ṭ	ḍ	15
t‘	ท	t	t‘	t	23
t‘	(ฐ)	t	ṭh	ṭh	16
t‘	ถ	t	th	th	22
t‘	(ฒ)	t	ṭh‘	ṭ‘	18

t‘	ธ	t	th‘	t‘	24
t‘	(ฑ)**	t	ṭ‘	ṭ	17
l	ฉ	l	l	l	36
l	(ฬ)	l	ḷ	ḷ	42
n	น	n	n	n	25
n	(ณ)	n	ṇ	ṇ	19
j/n	ญ*	j-/-n	y′	ň	13
r	ร	r	r	r	35
b	บ	v	b	v	26
p	ป	b	p	b	27
p‘	พ	p	p‘	p	30
p‘	ผ	p	ph	ph	28
p‘	ภ	p	ph‘	p‘	32
f	ฟ	f	f′	f	31
f	ฝ	f	f	fh	29
m	ม	m	m	m	33
w	ว	w	w	w	37
ʔ	อ	x	—	’	43
ʔ	ะ	x	ḥ	x	

ʔaʔ	อะ	xax	ăḥ	’ăx	(1)
ʔa	อั	xa	ă	’ă	(2)
ʔaː	อา	xar	a	’ăr*	(3)
ʔi	อิ	xi	ĭ	’ĭ	(4)
ʔiː	อี	xij	i	’i	(5)

ʔɯ	อึ	xy	ŭ-	'ÿ	(6)
ʔɯː	อื	xyw	u-	'y	(7)
ʔu	อุ	xu	ŭ	'ŭ	(8)
ʔuː	อู	xuw	u	'u	(9)
ʔeʔ	เอะ	xejx	ĕḥ	'ex	
ʔe	เอ็	xe	ĕ	'ĕ	
ʔeː	เอ	xej	e	'e	(10)
ʔɛʔ	แอะ	xex	æḥ	'eex	
ʔɛː	แอ	xer	æ	'ee	(11)
ʔoʔ	โอะ	xowx	ŏḥ	'ox	
ʔo	อ	xo	ŏ	'	
ʔoː	รอ	xow	o	'o	(14)
ʔɔʔ	เอาะ	xox	ǫḥ	'aex	
ʔɔː	ออ	xor	ǫ	'ŏr *	
ʔəʔ	เออะ	xaŭx	œḥ	'oex	
ʔə	เอิ	xaŭ	œ-	'œ-	
ʔəː	เออ	xaŭ	œ	'œ	
ʔə̯ː	เอิ	xaŭ	œ-	'œ-	
ʔiə̯ʔ	เอียะ	xix	ieḥ	'iiex	
ʔiːə̯	เอีย	xir	ia/ie	'iie	
ʔɯə̯ʔ	เอือะ	xyx	ŭ-ăḥ	'yoex	
ʔɯːə̯	เอือ	xyr	u-a/u-œ-	'yoe	
ʔuə̯ʔ	อัวะ	xux	ŭăḥ	'wăx	
ʔuːə̯	อัว	xur	ua/ie-	'wă	
ʔai	(ไอ)	xajx	ăĭ	'ăĭ	(13)
ʔai	ไอ	xajx	ăi	'aĭ	(12)

ʔai	อัย	xajx	ăy	'ăj	
ʔai	ไอย	xajx	ăiy	'aĭj	
ʔaːi	อาย	xaj	ai	'aj	
ʔau	เอา	xawx	ăo	'ae	(15)
ʔaːu	อาว	xaw'	ao	'aw	
ʔui	อุย	xujx	ŭi	'ŭj	
ʔoːi	โอย	xojx	oi	'oj	
ʔɔːi	ออย	xoj	ǫi	'ooj	
ʔəːi	เอย	xyjx	œi	'ei	
ʔɯːə̯i	เอือย	xyj	ɯ̆œi	'yoei	
ʔuːə̯i	อวย	xuj	uoi	'wj	
ʔiu	อิว	xiwx	iu	'ĭw	
ʔeu	เอ็ว	xĕwx	ĕo	'ĕw	
ʔəːu	เอว	xewx	eo	'ew	
ʔɛːu	แอว	xew	æo	'eew	
ʔiːə̯u	เอียว	xiw	ieo	'iiew	
ʔam	อำ	xamx	ăm̩	ăm	(16)
rɯ	(ฤ)	ry	r̩ŭ	r̩	
rɯː	(ฤๅ)	ryw	r̩ɯ̆	r̩yw	
ri	(ฤ)	ri	r̩ĭ	r̩	
rə	(ฤ)	raỹ	r̩œ	r̩	
lɯ	(ฦ)	ly	l̩ŭ	l̩	
lɯː	(ฦๅ)	lyw	l̩ɯ̆	l̩yw	
◡	๎ ๘	-x	◡	◡	
ʔɔːn	อร	xorn		'r	
ʔan	อรร	xanx		'rr	

この表における括弧つき番号は，母音符号表につけたもの。

17番 ʈ [t‘] は，語中で [d] に実現することがある。

なお，子音字間の無表記軽母音として，パーリ語からの借用には ă [a]，一般には ŏ [o] がある。

* ăr，ŏr は1字相当。このăとŏは，それぞれ子音字間無表記軽母音に当たるのだから。

ɽ ɭ は現正書法では用いない。

別に，黙音符（☛），短音符（☞）があり，それぞれ黙字前の（，母音字上の˘で表わす。

8.08　この転字法（試案）において，hじしんと，このhと複合表記される字母（h‘は別）はすべて上位字で，それにs系の4字を加えると，すべての上位字がそろい，それ以外には上位字がないことになる。

これらと同音でも，hを転字面に含まないこと（これも下位字の h‘ は別）は，下位字の目印となる。なお，これはのちに述べる声調を示すhの用法と重なる。

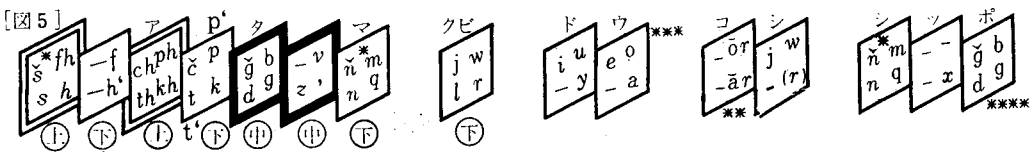
無気瞬間音に集中している7字の中位字，その一方で有声持続音（鼻音・流音・半母音）の7字はすべて下位字で，この外に無声持続音と無声有気瞬間音の下位字群（原則として7字）があるわけである。（あとに9.01であげる音節表記図式を参照のこと。）

8.09　転写は，理論的表記に徹しているため，見る通りに生硬な形式化を招いている。そこで，実際的見地からは，次のような表記上の処置を考慮する。まず，語頭の子音字のうちxは省く。語末の子音のうち，wx と ỹx と jx を，それぞれuとyとiに置き換える。

転字は，繁雑をいとわず，できる限りもとの綴りの各字に忠実に対応させることを原則とした。その結果あまり不自然に過ぎる場合には，例外として特別の処置をした。例えば，[ʔɔː] を ’ŏr あるいは ’ooで示し（しかし，[ʔəː] を ’oe で；また [ʔaː] を平行に ar とする理由は，のちにあげる音節表記図式の解説で明らかになる。），[ʔiə̯] を ’iie で示すなどもその例である。また，ʔə を ’eĭ でなく ’oĕ で，ʔəː を ’ei でなく ’oe で示すのは，とくにそうして不自然さを救うためである。

末尾子音の転写は，いうまでもなくその音価に対応させ，転字では，その用字のままに表記する。

9.01　ここで改めて，文字表記における音節のつづられかたをアタマ・クビ・ドウ・コシ・シッポに分けて検討することにしよう。それを逐一述べるより，まず，さきに音節について手に入れた図式にならって，その全貌を眺めるならば，理解がはやいだろう。次の音節表記図式ではさきに挙げた転字法に従って各字母を示すことにする。



9.02　子音字，š，ň，ǧ（*）の音価は，s，j-/-n，d に移っている。

コシの ŏr と ăr（**）は，無表記（つまり子音間発生の短母音）の母音の音質を前提とする子音的な項，rである。いいかえれば，rが先行の母音の質を帯びたふたいろに分けて別々

の字を与えられているわけである。

なお，子音に続くｒと rr が，それぞれ［ɔːn］と［an］に読まれることは，ŏr をコシの ăr の座に据えるｒで示し，ăr をさらにそのｒと重ねてコシの（ｒ）の座に置くｒとして考える余地も残している。もっとも，［ɔːn］と［an］の［n］までそれで引き受けるわけには行かない。

ドウのｏ（***）は，本来の ăŭ から由来して，ăĭ と対になるはずのものである。しかし，基本的には，母音字の長短の別を無視し，その両者ともまとめてひとつとして取り上げている。

シッポの有声瞬間音（****）では，ひとつの音に対して多くの種類の字が当てられる。

［表30］　［p□］に対して，v, b, p, p‘, ph, f, fh;

［t□］に対して，

z, ẓ, d, ḍ, t, ṭ, t‘, ṭ‘, tr, th, ṭh, s, ṣ,

s‘ らと，ǧ, č, c‘, ch, š;

［k□］に対して，g, k, k‘, ḳ, kh, ḳh;

なお，鼻音の［n］に対しても，n, ṇ, r, l, ḷ と ň が当てられる。

その用法は，語によって定まっていることはいうまでもない。

9.03　この図式に示しておいた通り，上位字は無声摩擦音と有気瞬間音に限られ，しかもそれらの音には，どの音に対しても上位字の用意がある。この類の音に対しては，また下位字の用意があり，さらに鼻音・流音・半母音に対しては，下位字だけがある。瞬間音のうち無気音は，有声・無声にかかわらず，中位字だけである。

転写における音節図式は，3軸の相関束で成立したが，現在の文字表記では，4軸になる。それに，例外として4軸上のどこにも配列されない p‘（pと同位同音）と t‘（t と同位同音）があり，専ら借用語の表記に用いられる。

9.04　旧正書法には，さらに同音異字としての系列が配列される軸が用意されなければならない。元来，サンスクリットの反転音に当てられた字母の並ぶ軸がそれである。ここに示すことにしよう。反転音は下点を目印とする。

［表31］ṣ — □ — ṭh — ṭ — ḍ — ẓ — ṇ — ḷ

タイ文字の相関束は，次の通りになる。

［図6］

*’＝ŏr（同一字母）

10.01　次に，声調について，その転字に触れたい。まず，よっつの声調符号は，アラビア数字に置き換えて，その音節の右肩に添えれば転字は完成する。

［表32］

符号	名称	転字
꠰	majx xejg	1
꠰꠰	majx tow	2
꠰꠰꠰	majx drij	3
+	majx gjadaxwar	4
꠰꠰꠰꠰*		h-*

＊ このhが前に置かれた中位字または下位字は，上位字相当に取り扱われる。

10.02　声調符号は，上に述べた頭子音字の上中下の類別および音節末の閉鎖の有無，つまり音節表記（ひいては音節構造）と関連させたのち，いずれかの声調を指示する。

次は，各声調の表示法である。

［表33］

	上位字で始まる＊			中位字で始まる＊			下位字母で始まる＊		
	閉鎖でなく終わる	閉鎖で終わる		閉鎖でなく終わる	閉鎖で終わる		閉鎖でなく終わる	閉鎖音で終わる	
		長音節	短音節		長音節	短音節		長音節	短音節
平調									
抑調	1			1			h^1	h	
降調	2			2			1 / h^2		
揚調				3			2		
昇調				4 / h			h		

＊ ただし，’は中立で，それに続く字母について上中下を見る。また，無表記の短かい挿入母音［a］の存在にもかかわらず，その次の音節の声調表記は，この［a］の添わった字母によって定められる。

10.03　hが先行していれば，このhじしん上位字なのだから，その音節は上位字で始まる型にはいることは当然といえよう。そこで，音節表記の上からは，次のようにまとめることができる。

［表34］

	上－S＊	中－S	下－S	上－C＊	中－C	下－C	上中下＝C
－φ	昇 ／	平 ••	平 ••	抑 ∨	抑 ∨	降 ＼	平 ••
－ 1	抑 ∨	抑 ∨	降 ＼				
－ 2	降 ＼	降 ＼	揚 ∧				
－ 3		揚 ∧					
－ 4		昇 ／					

＊ Sは，鼻音・流音・半母音に限られる下位字。Cは，上中下にわたるS以外の字，つまり音価としては，閉鎖音で，それによって，必ずいわゆる閉音節を生ずることになる。（もちろん，鼻音で終わる場合を除く。）

11.01　句読点については，次のようなものがある。

［表35］　a) 1字分明け　—　語間　　◎　—　文章の初の

2字分明け　—　句間　　ๆฯ　—　文章の末尾

3字分明け　—　節間　　๏ฯ　—　文書の結び

4字分明け　—　文間　　๎　—　黙　音　符

b)　ๆ　majx xjamog　　音節重複符

ฯ　bajx xjarn noj　　表記省略符

ฯฯฯ　bajx xjarn xjajx　　語句省略符

—　xjaddipaq　　引用符

c) 外来の句読点も用いられる。

•　majx habparg

?　bradsanij

!　xadsagjejrij

( )　nax kalikid

“ ”　xanxjax bragard

〃　vudpax sanxjar

12.01　これまで取り扱ってきたスコータイ文字は，13世紀に初期の文献を持ち，同時代のアンコール・ワットのクメール文字に全く似ている。パーリ文字になくて，スコータイ文字にある字がクメール文字にはじめて見出される。このスコータイ文字がラーイスターイ体からファーカム体になり，アユッタヤー時代に現在の近代字体となった。始め子音字37，母音字13，声調符号2だった。これがのちに，パーリ語表記のため，子音字7，母音字8，声調符号2を加え，現在のルアンプラバーン文字となった。

字のうち，h‘ は ŏr から，š は č から，fh と f はそれぞれ ph と p から造られたことは，その字形から見ても明らかである。反転音と有気有声音（k‘，c“ ṭ，t‘，p‘）に当てる合わせて12字は，サンスクリットのために用意されている。

---

④ Jean Baptiste Pallegoix, Grammatica linguae thai. Bangkok, (1850).

⑤ Oscar Frankfurter, P. Petithuguenin, J. Crosby, Proposed system for the transliteration of Siamese words into Roman characters. Journal of the Siam Society 10 (1913).

ま と め

13.01　タイ語の音韻ならびにその転写法については，すでに（1947年，1956年，1964年）私として触れることがあった。その終始変わらない見方は，＜音節組織の上で量が質にかわって現われる＞（歴史的にではなく）ということだった。それは，今回も追究した見方である。その基本はとにかくとして，音節図式については，まだ考えが熟していなかったので，今回は特にその点で格段の配慮をもって，その構図を明らかにした。そして，相関束の3軸構造について一貫させえたし，クビとコシの位置も保証しえた。結局，ドウの母音項には3軸2層6種が立てられる。

13.02　転字については，私案を発表したことはなかったが，その4軸（ときに5軸）構造を明らかにし，クビとコシ，中でもコシの位置を定めて，ŏr と ăr の子音性をあばき，複雑に見えた母音符号の基本が転写における6種に一致することを示した。なお，この転字案はできるだけ，1字1記号で対応させ，必ずしも音価にこだわらなかった点に特徴がある。いうまでもなく母音符号の配列には，修正を加えることを惜しまなかったにせよ，タイ文字による表記への還元はたやすくなった。また，アルファベットに付ける符号を簡明に整理できたと思う。

例　文

14.01　　hmar qo（転字の例）

hmar dwă hnŷq¹ lăg nyoe¹ wwă ti¹ dlarz wĭq¹ karm² sxparn mar　knnx mye¹ 'ju¹ vn sxparn nănˡ　hmar lee lq baĭ naĭ năm² hĕn qae korq dwa 'eq　leex qae gorn² nyoe do kyn² kwar čin² di¹ garv mar 'ig dae¹ dwa　ğŷq dĭq² čin² nyoe² nai barg siie　zwj² hmarj war¹ ğx jeeq¹ 'ae　nyoe¹ čĭn² hnai¹ ğarg　hmar di¹ lee hĕn 'ju¹ naĭ năm² myoe¹ dĭq² gorn² nyoe² lq naĭ năm² leew²　dăq² nyoe² dăq² qae ğğm năm² harj baĭ naĭ dăn di　dg lq hmar qo¹ twar nănˡ siie dăq² nyoe² korq dn leex nyoe² di¹ dn 'jarg ğx zaĭ²

14.02　　már qòw（転写の例）

már dur nyq làg nŷr wur　tìj tălărd wìq càrm săxpárn　mar　cănăx mỳr xjŭw von săxpárn nân　már ler loq bajx najx nârm　hén qaw córq dur xeq　·lex qaw còrn nŷr dor cỳn gwăr cjin tìj càrb mar xĭjg tàw dur　gjyq tîq cjin nŷr najx bărg sír　zùj máj xwàr　gjax xjèrq xawx nŷr cjin xjăj gjarg már tij ler hén xjŭw najx nârm　mỳr tîq　còrn nŷr loq najx nârm lêw　tâq nŷr tâq qawx gòx gjom nârm háj bajx najx tan tij　dŏg loq már qòw dur nân sír tâq nŷr córq don ·lex nŷr tìj don xjărg gjăx zàjx

転写では，語頭あるいは音節頭位の x- はすべて省き，音節末位の -jx，-ŷx，-wxは，それぞれ- i -y，-u と置き換えると実用表記が得られる。声調符号の‥も省くことにする。（すでにこの例でも省いた。音節頭の・は軽声の表示。）

文　献

日下部文夫・松山納，シャム語転写案

Tôyôgo Kenkyû 2 (1947・3)，75-81.

日下部文夫，四つのことばの表記案

私家版 (1956・7)

日下部文夫，質と量，音節構造の斉一性と相関性の設定── シャム語・ベトナム語などの母音を材料として

「岡山大学法文学部学術紀要」17 (1964・3)，102-87 (15-30).

Cornelius Beach Bradley,

Some features of the Siamese speech and writing.

JAOS 44 (1924), pp. 11-28.

Mary Rosamond Haas,

The Thai system of writing. Washington, 1956.

G. L. Trager, Siamese phonemes.

歴史語言研究所集刊 29/1 台湾 (1957), pp. 21-9.